

毎日新聞 2007年(平成19年)10月24日(水)

### NPO 森林遊びサポートの取り組み

札幌市南区藤野に広がる市都環境林(藤野野鳥の森、40・5ha)を主な活動の舞台とするNPO法人「森林遊びサポートセンター」(小)林文男理事長(右)が、森遊びを通して、森林機能の多様性や地球温暖化対策への役割について理解を深め、環境保全を推進する。

同センターの活動が今年初めて、小学校の環境教育の一環に取り入れられた。5月に市立藤の沢小学校

## 植育樹通し環境保全

札幌市南区藤野(本間文敏校長、児童数188人)に講師として招かれた小林さんは「森林は友だち」と題して講演。その後、児童たちと一緒に藤野野鳥の森に隣接する学校林、小鳥の村(7・12ha)を散策。カラマツの木などを摘み取った。

「おえーっ、暑い」。子供たちは口々に苦さを訴え、つばを吐いた。森の案内人でもある小林さんは自ら生する高さ約4mの広葉樹の二ガキを見つめ樹皮をはいて、一人の子に「ほれ、なめてごらん」と差し出した。すると子供たちは次々と手を出して全員がなめるが、一般公募で集まった市

同センターの前身は91年4月に発足した「札幌森友会」。小林さんは54年の洞爺丸台風による道内の風倒木の被害の応援で、55年に青森県の営林局から札幌市に転勤して来た。万9000人を超える。藤野野鳥の森での活動は2月の雪解けとともに始まり、4月の間伐・枝打ち

民に登山や森林浴など森の活用を促すことと、森に親しむ活動を行って来たことをきっかけに有幸千人数で発足した。その後活動を続け、08年5月にNPO法人となった。現在会員は130人で、最高齢は88歳。下草刈りから間伐・枝打ちまでの森づくり活動を中心に、小中学生を対象に森を散策し、木の高さや幹を測定するなど、森遊びを行っている。これまで活動回数は約150回、参加者は延べ約2万9000人を超える。

残雪のため、ぬかるみの作業だった。参加者は約30人。木に絡みついたコケなどのつるを払うのも重要な作業だが、なかには鎌も持ったことのない参加者もいた。けがのないように毎回、作業説明や実技指導を行った上で、班分けして作業を行う。みな手弁当のボランティア。最初は慣れないとぎりやなで四苦八苦するが、慣れてくると大人でも夢中になって作業する。小林さんは「森は人間と一緒。大木でも小さな木も育てなければならぬ」と強い森を作り続けたい」と抱負を語った。



作業の事前説明をする小林文男さん(右から五人目)

NPO法人 森林遊びサポートセンターの取り組み

「これで子供達は二ガキを覚えたでしょう。木に生えたキノコ、セミの抜け殻、子どもたちは何にでも面白がって興味を持つ。めんこいんだわ」

「森は人間と一緒。大木でも小さな害虫ですぐ病気になるてしまふ。豊かな森にするためには丈夫な木を育てなければならぬ。地球温暖化を防止するためにも安全を第一に強い森を作り続けたい」

## 植育樹通し環境保全

ボランティアの森づくり活動の取り組みが新聞各紙・広報誌等に掲載されました。

## ボランティアの森林づくり

平成29年 4月20日(日)



## 「全国植樹祭の森」手入れ作業

